

積み木課題における「学び」の変化に関する分析

—知的障害特別支援学校小学部における友達同士のペアによる取り組みの観察—

○畠山 和也

衛藤 裕司

(埼玉県立所沢おおぞら特別支援学校)

(大分大学教育学部)

KEY WORDS: 積み木課題、「主体的・対話的で深い学び」、知的障害特別支援学校

I. 問題と目的

公示された次期学習指導要領では、教科等を越えた全ての学習基盤として生まれ活用される資質・能力の育成に向けて「主体的・対話的で深い学び」の実現を図ることが示されている。この「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」について、知的障害のある児童生徒に対して、どのような授業づくりを行えばよいのか、その実践研究の報告はまだ少ないのが現状である。ところで、この授業づくりにおいて、どのような課題を教材とするのかにより、「学びの深さ」は変わってくるものと思われる。この課題の選定は授業づくりに大きな影響を及ぼすと考えられるが、そのための基礎的資料は十分ではない。そこで、本研究では、積み木課題を用い、より効率的に取り組めるようになるのかを観察・分析する。児童自らが考え、又は友達の様子を見て判断し、自らの方法として取り入れようとするなど、「工夫」を伸長する課題であるのかを詳細な分析を通して、検討する。

II. 方法

1. 参加児童

知的障害等別支援学校小学部に在籍する4, 5, 6年生児童8名であった。ペアは以下の通りであった(表参照)。

表 ペアごとの対象児童の障害名及び学年、性別

ア	A児:知的障害を伴う自閉症:6年生男子	B児:知的障害を伴う自閉症:6年生男子
イ	C児:知的障害:6年生	D児:知的障害を伴う自閉症:5年生男子
ウ	E児:知的障害を伴う場面緘黙:6年生女子	F児:知的障害を伴う自閉症:5年生男子
エ	G児:ダウン症:6年生	H児:ダウン症:4年生男子

※本研究発表に関しては学校長の承認を得ている。

2. 対象課題

ペアで一つの机を使用し、2m離れた場所から細長くうすい積み木ブロックKAPLA(長さ15cm×幅3cm×厚さ1cm×600個)を運び、机の上で積み上げるという課題を設定した。3分間(タイマーで提示する)のできるだけ高く積み上げ、1番高く積み上げたペアが「勝ち」となるというルールを設定した。

3. 手続き

教員は具体的な指示はせず、残り時間の提示や工夫が見られた児童の行動に対して肯定的な評価の言葉かけを行った。全7回実施し、すべてVTRによって記録した。参加児童の行動は全て行動レベルで書き起こされ、その中で新しく出現した生起回数の少ない行動に着目した。具体的には、①「積み方の変化」、②「積み木を運ぶ際の変化」に関して時系列的に記録した。行動観察の項目は、①では、積み木を積んでいくときの持ち方・積み方、積み上げながらバランスを整えることなどの変化について、②では、積み木を運ぶ際の方法及び回数、ペア同士の役割分担の変化についてであった。

III. 結果

積み方として、以下の5通りの方法が観察された。

- ①片手で1枚持ち、1回につき1枚積む
- ②両手で1枚持ち、1回につき1枚積む
- ③両手で1枚ずつ持ち、1回につき2枚積む
- ④片手に複数枚持ち、連続して積んでいく
- ⑤両手に複数枚持ち、連続して積んでいく

個々の児童においてより効率の良い方法を見出して変化していく様子が観察された(図1参照)。

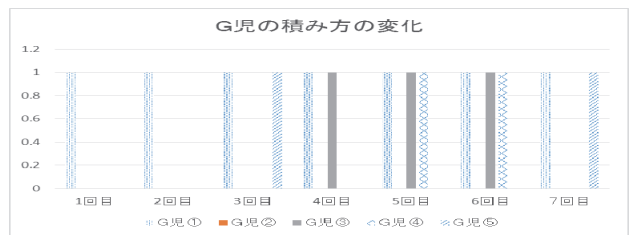


図1. G児の積み方の変化

また、積み上げた塔が崩れた経験から積み上げながらバランスを整えることが観察されるようになった。

積み木の運び方として、以下の5通りが観察された。

- ①片手でわしづかみにして運ぶ
- ②両手でわしづかみにして運ぶ
- ③束ねて持って運ぶ
- ④服の裾を袋にして運ぶ
- ⑤連続して運んで机にためてから積み始める

個々の児童においてより効率の良い方法を見出して変化していく様子が観察された(図2参照)。

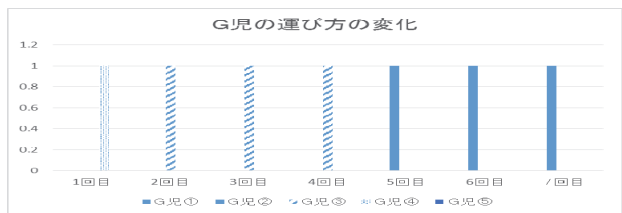


図2. G児の運び方の変化

IV. 考察

本研究では、参加児童自身が「どうすれば時間内により高く積み上げることができるのか」を考え、ペアと協力し合い、自ら「工夫」する様子が多く観察された。

授業後の感想発表で「高く積むために気を付けたこと」を尋ねたが、観察されたことを言語的に表現できた児童はいなかった。ペアになった児童と言葉だけではない対話や過去の経験を踏まえた自己との対話を通して、積み木課題に取り組む姿が見られたことから、過去の経験から得た知識を活用し、より効果的で効率的な方法を見いだすための教材として、積み木課題は有用であると考えられる。

(HATAKEYAMA Kazunari, ETO Hiroshi)